



TITLE:

[紹介] 人民共和國に於ける世界文學選讀書目

AUTHOR(S):

都留, 春雄

CITATION:

都留, 春雄. [紹介] 人民共和國に於ける世界文學選讀書目. 中國文學報
1955, 2: 152-161

ISSUE DATE:

1955-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176584>

RIGHT:

紹介

人民共和國に於ける世界文學選讀書目

終戦後、中華人民共和國が誕生して以來、我々の關心を唆つたのは、この新しい社會は文學を如何に考え、また、過去の文學を如何に視るか、ということであつた。人民共和國の文學觀については、我々は、一九四二年五月二日と、同月二三日になされた毛澤東氏の「延安文藝座談會における講話」によつて、その概略を察し得る。つまり、マルクス・レーニン主義の立場から眺めた文學觀である。例えば「存在が意識を決定し、階級闘争と民族闘争との客觀的現實が、われわれの思想・感情を決定する」という見地に立つて、「われわれが問題を討論するには、實際から出發すべきで、定義から出發すべきではない。もしわれわれが教科書に従つて文學とは何か。藝術とは何か。という定義をさがしだした上で、それらの定義にしたがつて今日の文藝

方針をきめ、今日うまれてゐる種々の見解や論争を批判するとすれば、そうしたやり方は正しくない」という風に云われていることなどである。

この立場は、人民共和國としては基本的なものであるけれども、講話の冒頭で、

「今日みなさんにお集りねがつて座談會を開くのは、みなさんと意見を交換し、文藝の仕事と一般的な革命の仕事との關係を研究し、革命文藝の正確な發展を求め、革命文藝がその他の革命の仕事に、更によき協力援助ができるようにして、われわれ民族の敵を倒し、民族解放の任務をなすとげようとする目的からなのであります。」

と述べられてゐるように、その當時の一部の文學者の、革命に對する結びつきが、切實性を缺くことに對してなされた發言であるので、例えば、同講話中で、

「現在の世界においては、すべての文化または文學・藝術は、みな一定の階級に從屬し、一定の政治方針に從屬している。藝術のための藝術、階級を超越した藝術、政治と併行し、もしくは政治とたがいに獨立しあつてゐる藝術と

いうものは、實際には存在しない。プロレタリアートの文學・藝術は、プロレタリアートの全革命事業の一部分であり、レーニンがいつたように、革命という機械全體のなかの『齒車やねじ釘』なのである。……文藝は政治に従屬するものであるが、また反對に偉大な影響を政治に與えるものである。……なお、われわれのいう文藝は政治に従屬する、という場合のこの政治とは階級の政治、大衆の政治のことであり、いわゆる少數政治家の政治のことではない。……」

といったことが述べられていることに對して、或る種の疑念——文學が、文化という言葉に近い意味での政治に従屬するというのならばともかく、結果からみてそうだということから、直ちに、文學は政治（狹義の）に従屬すべきだと言うことに危険性がないかどうか、といった疑念——が泛ぶかも知れないけれど、こういつたことも、當時の對日戰爭中という特殊の状況下に述べられていることを考えあわせると——例えば戰時中は、日本にも文學報國會なるものがあつた——いますこしの靜觀を俟つのが妥當なよう

にも思われたのである。

ところでその後も、二回の文學者代表大會などで、いくつかの發言があつたが、一九五四年八月付「文藝學習」は、

「文藝工作者が政治理論と古典文學を學ぶ參考書目」

という見出しで、中外の古典一百數十に及ぶものを選択して發表した。つまり、人民共和國の擇んだ世界文學百選とも申すべきものであり、從來の抽象論、或いは斷片的なものとなり、その主張が、大量に具體化された形において示されたもので、先頃、岩波から出版された桑原武夫教授の「文學入門」卷末所載「世界近代小説五十選」などと思ひあわせると興味深いものがある。

然しながら、最初に掲げられた編輯部の説明中にも述べられているごとく、將來、もし必要あれば、第二、第三の書目を發表する、というのであるから、なお不安定なものを含んでいるようであるが、大體の傾向は考えられる。以下、管見の所感を述べてみたい。（政治理論に關する書目については、目的の範圍外であるので、ここでは割愛した。）

中國の過去の文學について、先ず第一に擧げられているのは、

詩經（通行本）

である。この書物が擇ばれたのは、古代の人民の政治、或いは生活に對する素朴な感情が、あるがままに流露しているからであらう。その點、尙書などは、やや資格にかけざる爲にはぶかれたのであらうか。尤も詩經中にも、資格にかけざる歌謡がないわけではない。けれども、そうしたものを含みつつ、民衆の敘情の最初の文學的結晶と云える。また、立場の如何を問わず、このころのものから文學をひとつ擇ぶとすれば何人も詩經に指を屈するだらうから、それほど特別な意味をつける必要もあるまい。次には

論語（通行本） 孟子（通行本） 莊子（通行本）

があげられている。編輯部は、この書目の選擇について、次のごとく述べている。「内外の古典文學の名著の部分は、ただ最も社會に影響のあつた一連の作家の代表作品を羅列した」と。さすれば、そうした意味で、中國のこれまでの思想中から、論語・孟子・莊子がとられることは、異論の

ないことであらう。寧ろ老子が何故に割愛されているかという理由について考えることが必要に思われるが、老子が（多分一應）割愛されたのは、その思想によるといふより、恐らくその敘述の晦澁さと難解さとに、より一般性を認め難かつたからではあるまいか。

楚辭（通行本）

新中國になつてからの、楚辭の非常な流行は、先ず第一に我々の目を引いた。大抵の書物では、屈原は中國最大の民衆詩人と稱され、革命文學の淵源、濫觴をここに求めようとしているかの如くであつた。こうしたことから、若し斯くのごとき書目が發表されるなら、第一にその選にのぼるであらうことは、當然豫想されるのであるが、それでは、かかる楚辭の流行は、いかなる理由によるのであらうか。

一體、楚辭を一貫して流れている特色のひとつは、（屈原の作でないといふものは除いて）ある熱狂的な感情であつて、この情熱が、人民共和國の置かれているような特殊な時期の國家において昂揚を要求される愛國的情熱と、その距離が近いのではないかということ、それが原因のよう

に思われる。次は、

史記（司馬遷著、通行本）

である。正史ではこの史記がただひとつ選ばれているが、それはこれが、古今を通じて最も愛讀された書物のひとつであり、もつとも親しまれているもののひとつであるからであろう。また、その情熱精彩に富む文體は歴史文學の代表としても最も適當であるからであろう。

文選（蕭統選、通行本） 古文觀止（通行本） 古詩源

（沈德潛選注、通行本。樂府の部分は人民文學出版社「樂府詩選」を參照のこと）——書目では古文觀止と古詩源のあいだに陶靖節集が入っている。——

以上三つは、中國における現在までの最もオーソドックスな、或いは最もポピュラーな詩文または文・詩のアンソロジーである。このうち古文觀止は、わが國において最も盛んに行われた文章軌範・古文眞寶の類であり、清の姚鼐の擇んだ古文辭類纂などと廣い意味では同類の書であるが、特に古文辭類纂が選擇されずに前者がとられたのは、從來から一般市民の間に行われた古文の選本であることと、桐

紹 介（世界文學書目）

城派という、より狭い少數派の立場から擇ばれた選集ではない、ということによるのであろう。これらのアンソロジーに收められているものすべてが、何れも文學に對する毛氏の文藝講話の主張を満足させるものとは明らかに考えられない。然もなお擇ばれていることは、文學革命このかた一時起つた古典抹殺論に近い議論が、一九四九年の革命を契機にした古典再認識論に變つたのではないかということと、または、當事者の幅のある？ 選擇眼が感じられて興味深い。こうした態度は、中國語ローマ字化運動への一過程として識字運動を行うという、（逆コースにみえることも實行する）態度と相似ているのであろうか。更にもうひとつ穿鑿を加えると、當事者にこうした選擇をさせるような欲求が中國人民の心中に根強く存するのも知れない。陶靖節集（陶澍注、通行本） 李太白集注（王琦注、通行本。或いは「李白詩選」 人民文學出版社近刊） 杜少陵集詳注（仇兆鰲注、通行本。或いは「杜甫詩選」 人民文學出版社近刊） 白居易詩選（人民文學出版社近刊） 蘇東坡詩文選 陸游詩選——書目では、白居易詩選と蘇東坡詩

文選との中間に唐詩三百首が載つてゐる——

詩の別集としてこの書目では擇ばれてゐるのは、楚辭を除いて以上六人の詩集だけである。このうち、蘇東坡を除いた他の五人は「祖國十二詩人」（一九五三年二月初版・王瑤等著）中にあげられてゐる。祖國十二詩人中の記述によつて判斷すると、陶淵明については、いろいろ賛成し難い點がありつつも、耕作する歡びを知り、且つ耕作する農民の氣持を知つてゐた田園詩人である點で、李太白については、人民にひろく普遍的な熱愛を得たからということ、選擇されたことになる。とすればこの書目では、ひろく人民に愛されてゐるということが充分選擇の一理由となるようである。蘇東坡が擇ばれてゐるのもこの理由によつてではないかと推測される。杜甫が擇ばれてゐる點については問題はあるまい。白居易については次のごとく祖國十二詩人冒頭に記されてゐる。「九世紀に中國唐代詩壇にあらわれた人民を熱愛した大詩人白居易」と。かく稱されるのは、新樂府中の「賣炭翁」や「折臂翁」等、また彼自身も「與元九書」中で重きを置いてゐた諷諭詩などによつてであ

らうか。陸放翁についても、屈原・杜甫をうけついで祖國を愛し、人民を愛する思想と情感に満ちた優れた詩人、だと、同じ祖國十二詩人中に述べられてゐる。

唐詩三百首（蘅塘退士輯、通行本） 唐宋諸賢絕妙詞選（黃昇輯、通行本） 中興以來絕妙詞選（黃昇輯、通行本）——書目では陸游詩選と唐宋諸賢絕妙詞選の間に唐宋傳奇集が入つてゐる——

唐宋の詩・詞については、以上の三つのアンソロジーが舉げられてゐる。さきの古文觀止がそうであつたように、唐詩三百首も或る人にとつては俗書だと言われるだらうけれども、他の多くの唐詩の選本をすてて、この書物のみを取つてゐるのは、この書目の場合、その俗書たる所以が逆に選擇の理由になつてゐるように思われる。

詞のアンソロジーとしての唐宋諸賢絕妙詞選と中興以來絕妙詞選については、同種のものに、清の朱彝尊編「詞綜」（唐・宋・金・元の百餘人の詞を選録）及び清の張惠言編「詞選」があるが、前者は分量からいつて手頃でなく、後者は常州詞派という立場から選録してある點で採られな

かつたように思われる。古文觀止・唐詩三百首それからこの二つの詞選が採擇されていることなどからみて、總集の場合、ある特定の一派の立場から擇ばれたものでないことと、通俗的であることが、書目選擇の基準になり得るよう感じさせられる。

唐宋傳奇集（魯迅校錄、人民文學出版社） 西廂記（王實甫著、通行本。或いは王季思校注本、新文藝出版社）

元曲（童伯章選註、商務印書館、萬有文庫、學生國學叢書第一集。或いは人民文學出版社選本、近刊） 牡丹亭（湯

顯祖著、通行本） 桃花扇（孔尚任著、通行本） 三國志

演義（羅貫中著、作家出版社） 水滸（施耐菴著、作家出

版社） 西遊記（吳承恩著、作家出版社） 儒林外史（吳

敬梓著、作家出版社近刊） 紅樓夢（曹雪芹著、作家出版

社） 古今小說（商務印書館排印本） 警世通言（馮夢龍

輯、刊本。或いは世界文庫本） 醒世恆言（馮夢龍輯、刊

本。或いは世界文庫本） 聊齋志異（蒲松齡著、通行本。

或いは「聊齋志異選」人民文學出版社で編輯中）

以上十四は傳奇・曲・小説で、その中には最も民衆に親

紹介（世界文學書目）

しまれて來たものを含んでいる。この書目は、文藝工作者のため、つまり民衆のためであらうから、これらのものが、これだけの比重を占めているのは當然である。またその選擇もおおむね妥當で文學的價値の高い代表作が擇ばれている。魯迅校錄の唐宋傳奇集はもつとも信頼できるテキスト。童伯章選註元曲は、日本の元曲選釋（現在一部既刊）は別として、中國ではこれ以外に註がついたものがほとんどないこと、などからであらうか。紅樓夢については、その内容には必ずしも革命文學にとつてふさわしくなからうけれども（他と比較して）、村上哲見學士の紹介にもあるごとく李希凡・藍翎等の紅樓夢批判論争においては、民衆に非常に愛されていることがその存在價値を決定し、反對者を屈服させた、と聞いている。

ただここで、民國になつてから始めて重印された古今小說・警世通言・醒世恆言の所謂三言が全部採られているのは、いささか奇異な感じと同時にアンバランスな感じも受ける。今古奇觀あたりが採られてもよかつたのではあるまいか。最後は、

魯迅小說集（人民文學出版社） 魯迅雜文（各單行本。人民文學出版社） 魯迅雜感選集（瞿秋白選、上海出版公司）

である。民國革命以後の作家の作品で選擇されているのは魯迅のものだけである。彼は、その作品の價值も恐らく古典的價值を認められているのであろうし、また、近代中國文學のみならず今日の革命文學の祖でもあろうから、それも當然であらう。

以上をとおして、この書目の中國古典文學選擇からうける感想は、今後產出される新文學は別として、古典文學をふりかえる態度には、その革命文學理論を尖鋭に適用することを讓歩しているように感じられることである。それは、人民共和國の指導者の幅のある態度なのか、中國人民の古典に對する或る強い執着からなのかよくわからないけれども。

要約すると、人民に熱愛されていて、出來るだけ反革命的でなく、特別な一部サークルの立場から選ばれた選本でないこと、そして文學史的にオーソドックスな價值を有し、

あるいは影響を與えたもの。ということになりそうである。註 なお、書目では近刊としてあるもののうち、一部は既に出版されている。

ロシアとソ聯の文學、及びその他の各國の部分

その書目を挙げれば次のごとくである。（本の題名は、大部分、日本で親しまれているものに改めた）

ロシアとソ聯

クルイロフ寓話 知慧の悲しみ（グリバエドーフ） イフ

ゲニー・オネーギン（プーシキン） 大尉の娘（プーシキン）

プーシキン文集 外套（ゴーゴリ） ミルゴロド

（ゴーゴリ） 檢察官（ゴーゴリ） 死せる魂（ゴーゴリ）

オブローモフ（ゴンチャロフ） レールモントフ詩

選 現代の英雄（レールモントフ） 獵人日記（ツルゲーネフ）

その前夜（ツルゲーネフ） 父と子（ツルゲーネフ）

雷雨（嵐に生まれ出ずるもの）（オストロフスキイ）

サルツイコフ寓言 ゴロヴリョフ家の人々（シチエードリン）

何を爲すべきか（チュエルヌイシェフスキイ） ロシ

ヤは誰にとつて住みよいか（ネクラートフ） 戦争と平和

(トルストイ) アンナ・カレーニナ (トルストイ) 復
活 (トルストイ) チェーホフ小説選集 櫻の園 (チェー
ホフ) ゴーリキイ創作選集 どん底 (ゴーリキイ) 母
(ゴーリキイ) 幼年時代 (ゴーリキイ) 人間 (ゴーリ
キイ) 我が大學 (ゴーリキイ) アルターモノフ一家
(ゴーリキイ) マヤコーフスキイ詩選 レーニン (マヤ
コーフスキイ)

その他の各國

ギリシヤ イーリアス (ホメロス) オデュッセイア (ホ
メロス) イソップ寓話 プロメテウス (アイスキュロ
ス) アガ멤ノン (アイスキュロス) オイディプス
(ソフォクレス) メディア (エウリピデス) アリスト
パネス喜劇選

アラビヤ 千夜一夜物語

イギリス シェークスピア戯曲集 (選讀) 「ロミオとジュリ
エット」 「ハムレット」 「オセロ」 「リヤ王」 「マクベス」
「ベニスの商人」 「テンペスト」 ロビンソン漂流記 (デ
フォー) ガリバー旅行記 (スウィフト) トム・ジョー

ンズ (フィールディング) バイロン詩選 ドン・ジュア
ン (バイロン) シェーリー詩選 アイヴァンホー (スコ
ット) 虚榮の市 (サッカレー) ピックウィック・ペイパ
ーズ (ディッケンズ) デイヴィッド・コッパフィールド
(ディッケンズ) テス (ハーデイ) バーナード・ショウ
戯曲選

フランス

タルテュッフ (モリエール) ドン・ジュアン

(モリエール) 守銭奴 (モリエール) カンディッド

(ヴォルテール) 懺悔録 (ルソー) ラモアの甥 (ディ
ドロ) フィガロの結婚 (ボオマルシエ) 赤と黒 (スタ
ンダール) ウージェニー・グラランデ (バルザック) ゴ
リオ爺さん (バルザック) 従妹ベット (バルザック)

従兄ボンヌ (バルザック) 農民 (バルザック) カルメ
ン (附コロンバ) (メリメ) ノートルダム・ド・パリ
(ユーゴー) レ・ミゼラブル (ユーゴー) ユーゴー詩
選 ボヴァリー夫人 (フローベル) 椿姫 (デュマ・フィ
ス) 萌芽 (ジェルミナール) (ゾラ) ペンギンの島
(A・フランス) モーパッサン中短篇小説選 ジャン・

クリストフ（ロマン・ロラン） 砲火（バルビュス）

ドイツ ファウスト（ゲーテ） 若きヴェルテルの悩み

（ゲーテ） 群盜（シラー） ハイネ詩選 冬物語—ドイ

ツ—（ハイネ）

イタリー 神曲（ダンテ） デカメロン（ボッカチオ）

アメリカ 草の葉（ホイットマン） トム・ソーヤーの冒

険（マーク・トウエン） ハックルベリー・フィンの冒険

（マーク・トウエン） 鐵蹄（ジャック・ロンドン）

スペイン ドン・キホーテ（セルヴァンテス）

ノールウェー イブセン選集

デンマーク アンデルセン童話選

ポーランド ミツキエヴィッチ詩選

ハンガリー ペトーフイ・サンドール詩選

印度 マハーバーラタ（印度敘事詩） シャクンタラー

（カーリダーサ） タゴール選集

日本 源氏物語（紫式部）

朝鮮 春香傳

ロシアとソ聯の文學の書目が、其の他の各國のものより

比重が重くなつてゐるのは、兩國の間柄からみて當然である。また、その選擇も、今日のソ聯の評價に従つて擇んだのであらう。我々がみて第一に氣がつくのは、當然のことながらドストイェフスキイが全然擇ばれてないことである。それは恐らく社會主義共和國で拒否されている理由に基くと考えられるけれども、日本と異つて中國では、更にドストイェフスキイの異常性がその普及を阻害するのではないかとも想像される。因みに、中國では過去を通じて異常なものは（精神的に均衡のとれてないものは）嫌惡され、従つて生まれにくかつたからである。尤も、ドストイェフスキイについては、帝政ロシアの頃においても、クロボトキンにはあまり高く評價されてゐない（クロボトキン著ロシア文學の理想と現實）。ドストイェフスキイのことを除けば、ロシア文學については、我々のために擇んだとしても、先ず不穩當な選擇とも言えないのではなからうか。ロシアの近世文學は、多かれ少なかれ、その社會革命と切り離しては考えられないようであるから。

其の他の各國の文學選擇は、一瞥したところでは、大體

古典とされているものを、特別な意味あいからでなく擇んであるようである。ただ例えばバルザックで言えば「ゴリオ爺さん」「從妹ベット」「從兄ボンス」「農民」というように採られているのは、貴族階級またはブルジョワに壓迫され虐げられているものを描いた——毛澤東氏の所謂曝露さるべきものであるからだろうか。ポーマルシェの「セヴィラの理髮師」が採られずに「フィガロの結婚」が採られたのも、勿論貴族階級に對する抵抗という點があるからだろうし、バルビュスの「砲火」では、戦争の慘禍を痛烈に指摘した反戰的な意味あいから、ゾラの「ジェルミナール」は資本家に對する戰いという意味からなのだろう。スタンダールの「赤と黒」も、そうした意味であらうか。また、スウィフトの「ガリバー旅行記」ヴォルテールの「カンディッド」デイドロの「ラモアの甥」の如きも、社會諷刺や舊思想攻撃の書として、特別な意味がもたされているのかも知れない。とすると、ロマン・ロランが擇ばれてアン Dre・ジッドなどが擧げられてないのもうなづける。獨乙文學は、ドイツ・ロマンテイクから全然採られていない

紹介（世界文學書目）

とか、シラーは、群盜だけが採られているとか、多少のかたよりはあるようである。その他では、我が國では、ほとんど知られていないポーランドのミッキエヴィッチとかハングリーのペトーフイ・サンドールとかの詩選が擇ばれているが、これ等は、印度のマハーバーラタ、カーリダーサなどと共に魯迅によつて曾て紹介されたものであることを附記する。（魯迅・墳・摩羅詩力説）

以上のごとく、擇ばれ方に多少不安定なところがあるけれども、概して常識的に採られているように見受けられる。このことは、民衆に愛されるということへの考慮と、古典尊重ということのあらわれになるのだろうか。日本文學からは、ただひとつ源氏物語が擇ばれているのは興味あることである。

（京都大學 都留春雄）